

教科教育キャリアアップフィールド

表現運動・ダンスの指導について

—実技研修を通じた学びの展開—

保健体育専修 熊谷佳代

1. はじめに

「何を、どのように、どれくらい指導していけばよいのかわからない。」

「何のためにするのか。目標、手立て、評価がわからない。」

「表現運動は自分自身が苦手である。」

「運動会で決められた演技を指導することで時間を消化している。」

これらは、筆者が今までに公開講座等で出会った教員の表現運動・ダンスに対する声である。また筆者らが行った、教員に対する別の調査においても、積極的に表現運動の授業を行わない理由として「指導方法がわからない」「踊れない自分への不安」「準備が大変」「学習者が好まない」「作品づくりが大変」などがあげられた。

体育の他の領域に関しては、教えることは何で、出来るようになったことは何なのか、目指す姿はかなり明確である。しかし、表現運動・ダンス領域は具体的なある一つの目指すべき姿（動き）というものを示すことが難しい領域である。なぜなら、一人ひとりの表現（動き）を認めることから始まり、その違いを感じとることが教師にも子どもにも求められているからである。しかし、一人ひとりの表現（動き）が違うということはわかっても、その違いが何によるものなのか、また、違いをつくるにはどうすればよいのかわからない。だから、指導の際に戸惑いを感じるのではないだろうか。

昨年からは研修内容に実技研修を含めることにした。教師が今まで以上に積極的に表現運動・ダンスの指導に向かうためには、自信につながる確かな力を自らが体験することで培う必要があると感じたからである。

2. 研修内容

1) 概略

第1日目

- ・午前：ダンス研修会における実技研修

（今年度は岐阜県内の小・中学校教員を対象としたダンス実技研修会の講師を依頼されたこともあり、合同で実施した。それぞれの研修教員には事前に了解を得た。）

- ・午後：研修教員の問題意識に基づく議論および研修課題の設定

(単元指導計画を立て、実践することを課題とした。)

第2～4日目

・勤務校における授業実践

第5日目

・実践報告

2) ダンス実技研修内容

研修に参加した教員は12年目研修教員を含め18名であった。

概要は以下の通りである。

①『あいさつダンス』(オリジナル)

授業の導入場面における活動として、また、リズムカルなダンスによる多くの仲間との交流をめざして筆者が開発したものである。

2人が向かい合って32カウント踊り、次の16カウントで新しいペアをつくり、同じように踊る。次々とペアを変えて踊る。

②『アフリカン・リズムワーク』

平成17年度女子体育ウインターセミナー、ワークショップ(ジャッキー・ジョブによる)から。

基本は足踏みである。方向や速さを変えたり、アクセントをつけたり、上体の動きを加えたり、空き缶で音を出しながら変化をつける。2群に分けて音と動きで掛け合う。一体感を味わう。

③『即興ダンス～石のダンス～』

ウォルフガング・シュタンゲのワークショップを筆者が改変。

体のいろいろな所(腕、背中、頭、脚など)に石を乗せたまま落とさないように高さを変えたり、向きを変えたりしてゆっくり動く。物を使うことで自身に集中できる。5～6人のグループをつくり、石の受け渡しを行う。一人の体に石が複数乗っていることも、一個も乗っていないこともある。石が乗っていないでもどこかに乗せているつもりで動く。次に、石を使わずに動き、周りの人との調和を考え、高さや速さ、体の形を変える。

3) 研修教員による単元指導計画および実践

研修教員の指導上抱える不安や問題を明らかにした上で、大学側から指導計画案を提案し、研修教員が子どもの実態に合わせて改良を加え実践した。提案した指導計画案は、現職大学院生と共同で作成したものの一つであり、学習すべき内容をわかりやすくし、評価の観点を明確にしたものである。(現在多くの先生方に実践をお願いし、検証している。)

以下、概略を紹介する。

単元名『走って・跳んで・転がって○○』

単元目標

<技能>「走るー跳ぶー転がる」の運動からポップコーンや花火などをイメージし、空間を大きく使って勢いよく飛び散るように動くことができる。

<態度>お互いの動きのよさを見つけ合ったり、進んで練習に取り組んだりすることができる。

<学び方>ポップコーンや花火の特徴を表現するために、より大きく空間を使い、走り方、跳び

方、転がり方を工夫することができる。

- 1 時間目：新聞紙になって動こう
- 2 時間目：走るー跳ぶー転がる
- 3 時間目：ポップコーン
- 4 時間目：花火
- 5 時間目：発表

3. 研修教員の学び

研修前、教員は体育の領域の中で最も指導に不安があるとしていた。そのことについて本人は、小学校から大学までの自身の学習経験と関係しているのではないかと分析していた。それは自身の「おもしろい」や「なるほど」と感じる体験の積み重ねが十分でなかったため、何をどのように指導すべきかがわからず不安を抱えることになったのではないかと思われた。教材観や指導観が十分に確立されないまま現在に至っているように思われた。

研修を通して研修教員が何を感じ、何を学んだのか、研修後に寄せられた感想の一部を紹介する。

・『あいさつダンス』（実技研修）

コミュニケーションを高める心地よさを感じた。ぜひ、子どもたちにも伝えたい。

・『アフリカン・リズムワーク』（実技研修）

新しい分野のダンスとしての情報を提供していただいた。他の領域はある程度自分に経験があるため、書籍や雑誌から情報を取り入れることができるが、経験がないものは実際にやってみて初めて感じるができる。小道具を用いて音を出し、音と動きの「掛け合い」は集団として出来上がっていく楽しさを実感した。

・『即興ダンス～石のダンス～』（実技研修）

まずは自分が「浸る」こと。自分の中に一番抵抗があったのは、「表現」することへの戸惑いや恥ずかしさである。しかし、先生方の動きを見て「自分もやってみたい」「もっと上手になりたい」という気持ちになった。子どもたちもきっと同じであると思う。教師の動きにあこがれをもてば、「表現してみたい」という欲求は必ず生まれると感じた。

・『走って・跳んで・転がって』（授業実践）

「表現の授業はどの子も苦手意識があるだろう」という思い込みがあった。子どもたちが音楽に合わせて走ったり跳んだりする姿を見て、「本来、表現したいという欲求は誰もがもっているもの」という考えに私自身が変わった。また、ポップコーンや花火のグループ活動を通して子どもたちは、仲間との交流を深め、「グループのみんなでやって楽しかった。」という思いを持つことができた。また、普段の体育とは違う子どもが活躍する場面がたくさんあり、「表現を通して子どもは成長する」ということも実感できた。

4. おわりに

今回、研修教員の勤務校を訪問し研修内容として位置づけた授業実践を見せていただくことを計画していた。しかし、9月は先方の運動会や大学の教育実習などがあり、日程調整ができず断

念してしまい残念であった。

研修教員はこの研修を「自分の指導力を高めるための機会」と捉えて受講したようだが、果たしてその期待に応えられたかどうかは確かめられない。しかし、教員自身が実技研修に参加し「やってみたい」「もっと上手になりたい」と感じ、自身の授業実践を通して子どもの成長を実感したことから、この研修を指導の活性化につなげていただいたものと思いたい。

体育の場合、教材理解は自身の経験の質と量に左右され、深まるものとする。以前、ある中学校体育教師が切実な胸のうちを明かしてくれた。

「『いいねー。』『がんばっとるねー。』『よー動いとるねー。』は指導ではありませんよね。言葉や人間関係で生徒を楽しませることはできても、私はダンスを通して楽しませることはできません。」

筆者の12年目研修の方向性を指し示してくれる言葉であった。

最後に、12年目研修において現職教員と関わることは、日頃、研究室や限られた学生を対象とした講義の中では得ることができない、大学教員自身の教科の可能性と課題を探求する貴重な機会につながると考える。